

# 学校教育高度化センター関連事業（イノベーション科研）

## 生き方の学習ユニットにおける本年度の活動

報告者 田中 智志（教育学研究科 教授）

### 1. 生き方の学習ユニットの役割

本ユニットは、社会的レリバンスを有するカリキュラムの条件を、自己と世界の間を問う哲学教育、うつ予防を目指した心理教育、ソーシャルスキルの獲得に着目した心理教育、失業を切り口に社会との関わりを迫るキャリア教育の四つのプロジェクトによって解明する。

以下では、それぞれのプロジェクトの担当者が、進捗状況を報告する。（田中智志）

### 2. 各プロジェクトの進捗状況

#### (1) 哲学教育プロジェクトについて

哲学教育プロジェクトについては、田中を中心に、フランス、ドイツの哲学教育の現状について、文献調査、およびフィールドワークを行った。フィールドワークについていえば、田中が、2011年9月にフランスのボルドーにあるコレージュ（日本の中学校にほぼ相当する）の「市民」の授業、およびリセ（日本の高等学校にほぼ相当する）の「哲学」の授業を参観し、授業者とそれぞれの教科・授業について意見交換を行った。コレージュの「市民」の授業は、第二次大戦における兵士の心情、また政府のプロパガンダについて考えるという内容であった。またリセの「哲学」の授業は、19世紀の「野生児」についての教育史的事実を踏まえつつ、カントやリオタールの現代思想を引きながら、人間性は普遍的内在性かという問いをめぐる議論であった。どちらの授業の担当者も、学校教育における哲学の重要性を強調していた。とくに印象的であったことは、リセの哲学担当教員が、哲学の本務は制度化された思考から解放され、真に自由によりよく思考することである、と述べ

ていたことである。さらに詳細な検討が必要であるが、フランスの哲学教育においては、自己と世界との関係を自ら編み直す営みとして哲学が位置づけているということが、予想されるであろう。

（田中智志）

#### (2) うつ予防を目指した心理教育

##### 1-1) フォーカスグループの実施

これまで開発してきた授業案について、附属の先生方に改善点・修正点のアドバイスをいただくフォーカスグループの実施した。この中では、教員の視点から、一般の生徒に実施するために必要な工夫や、どの枠での実施が望ましいか、その他内容についての改善点、先生方ならばこのように応用するといった視点をいただき、より効果的かつ実施可能性の高い授業案を作成した。

##### 1-2) 抑うつ尺度の作成

現行の抑うつ尺度では拾いきれていない要素を盛り込んだ新しい中高生用の抑うつ尺度を作成した。

##### 1-3) うつ予防の授業実践と効果の検討

中高生においても増加している「うつ」について、その予防を目指した心理教育を行い、効果の検討を行った。（下山晴彦・堤亜美）

#### (3) ソーシャルスキルの獲得に着目した心理教育

では、初年度にあたる2011年は、1. 研究チームのたち上げ、2. プログラムの基本コンセプトの決定、3. サーベイ調査を踏まえて核となる授業案A(1)、B(1)の作成まで実施した。2の基本コンセプトとして、①SCによる実施から補助としてのSCまで、担任教師との協働の幅を広

く想定する、②児童や生徒が生きる現実の複雑さを視野に入れる、③多様性を知り多様性に関われるために、④対応に迷う場面で使えるアサーション能力の醸成（自分の声の発見）の4つを設定した。中学の家庭科／保健体育／総合学習で実施する授業で、家族づくり（A群）と性教育（B群）をふたつの柱とする。2012年度に6時間程度の授業案に設えて実施し、2013年には効果測定を伴ったデータを収集する。（中釜洋子）

#### （4） 失業を切り口に社会との関わりに迫るキャリア教育

不安定な雇用情勢が続き、誰もが思うようなキャリアを歩むことが難しくなっている現代、目先の内定の獲得にとらわれる前に、働き方や働くことの意味自体を問い直しておく必要がある。本研究では、自分なりのライフキャリアを築いていくために必要と考えられる“ライフキャリアレジリエンス”を高めることを目的とした実験授業のプログラムを開発し、その効果評価を行う。初年度の2011年度は、効果評価を行うためのライフキャリアレジリエンス尺度を作成するための予備調査を実施するとともに、東京大学附属中等教育学校の4年生を対象に、2012年3月12・13日に実験授業を行った。今後、ライフキャリアレジリエンス尺度を精緻化するとともに、授業効果の分析を進める予定である。（高橋美保）